

讀賣新聞

2010年(平成22年)

8月29日曜日

乳腺外科医(橋本) 梅村定司さん

ものたり ひと創り

手術は無事終了した。

昨年9月、同病院に隣接して、乳がん専門の医療セ

ンターを開設。県内に数人

しかいない乳腺専門医の1人を招き、2人で手術をこなす。放射線技師はマンモ

グラフィ撮影認定診療の有

切除した乳房の再建に、下腹部の脂肪を利用する「遊離真皮脂肪片移植」を、

独自に取り入れたのも、「患の世界では、顔や首の移植

欠けてしまう。下腹部の脂肪なら、これらのデメリットを克服できる。形成外科

を利用するが、必要な筋肉が欠けてしまう。女性

は「子どものためにもまだ死ねない」と、一言も弱音を吐かず、梅村さんも手を尽くしたが、結局「死んだ」。

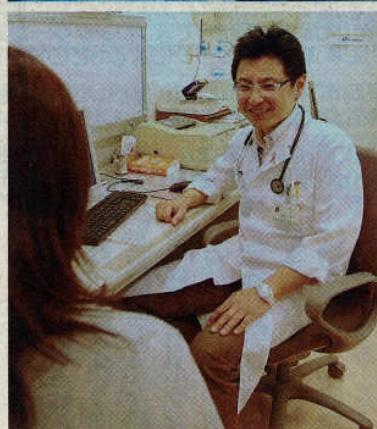
「親としての無念さややりきれなさを考えると…」このような人を一人でも減らしたい」。早期発見すれば助けられたかもしれない。

「紀和プレスト(乳腺)センター」(橋本市岸上23の1 0736・341-1255)
受付時間午前8時~11時半、午後1時~4時(原則予約制)、セカンド・オピニオンは別途対応、相談1件につき8000円(税込み、保険外診療)

乳房再建に新手法



手術室では、張りつめた空気が漂っている(橋本市岸上の紀和病院で)



手術室とは表情が一転し、笑顔で患者と接する梅村さん

に利用されてきたものの、生着率が良くないとされてしまった。梅村さんは、乳がんを補填する部位は筋量が多く、十分、生着すると判断。すでに、症例は60を超えた。救えなかつた命もある。

4年前に診た、小学1年の子供もを持つシングルマザーの女性が忘れられない。進行性の乳がんで、すでに

梅村医師の優しいまなざしは一転、鋭くなつた。手術室の空気が、ぴりっと引き締まる。感触を確かめながら、電気メスの「ジジッ」という音とともに、右乳房に切り込みを入れると、第1助手の医師が素早く止血する。梅村さんが言葉を発するのは、器具を医師に差し出す「器械出し」役の看護師に指示を出すときくらい。あとは、何も言われない。それでも、麻酔科医や看護師らが黙々と役割をこなしていた。1時間11分15秒で、

患者の立場優先「青洲目指す」

全身に転移していた。女性は「子どものためにもまだ死ねない」と、一言も弱音を吐かず、梅村さんも手を尽くしたが、結局「死んだ」。

「親としての無念さややりきれなさを考えると…」このような人を一人でも減らしたい」。早期発見すれば助けられたかもしれない。

「全身に転移していた。女性は「子どものためにもまだ死ねない」と、一言も弱音を吐かず、梅村さんも手を尽くしたが、結局「死んだ」。

「親としての無念さややりきれなさを考えると…」このような人を一人でも減らしたい」。早期発見すれば助けられたかもしれない。

「全身に転移していた。女性は「子どものためにもまだ死ねない」と、一言も弱音を吐かず、梅村さんも手を尽くしたが、結局「死んだ」。

「親としての無念さややりきれなさを考えると…」このような人を一人でも減らしたい」。早期発見すれば助けられたかもしれない。